宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　　第２０８集

小林市所在

立（たて）野（の）遺跡

地方道路交付金事業南西方工区道路改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１１

宮崎県埋蔵文化財センター

遺跡全景
（南東より）

調査区全景
（上方より）

序

本書は、平成 18 年度地方道路交付金事業南西方工区道路改良工事に伴い実施した立野遺跡発掘調査の報告書です。

宮崎県小林市に所在する立野遺跡は、霧島山麓の扇状地上に営まれた遺跡であり、発掘調査の結果、縄文時代早期の平栫式土器や撚糸文系土器、晩期の突帯文土器、弥生時代中期の土器など、多様な資料が出土しています。

これらの出土土器の特徴は、各時代における周辺地域との文化交流の諸相を映し出しており、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料となるものと考えられます。

本書に盛り込まれた資料が学術資料としてのみならず、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成２３年１１月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　森　隆茂

例言・凡例

1　本書は平成１８年度地方道路交付金事業南西方工区道路改良工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県小林市大字南西方字立野所在の立野遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、宮崎県土木部（当時・平成１９年度より県土整備部）小林土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。現地調査は平成１８年８月２１日から１０月３１日まで行った。

3　現地調査における実測・写真撮影などの記録作成は丹俊詞（調査第二課主事・所属と職名は当時）・谷口千尋（調査第二課主査）が発掘作業員の協力を得て行った。なお、空中撮影は（株）南日本総合コンサルタントに、基準杭設置は（有）ジパングサーベイに委託した。

4　整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターにて行った。図面作成・実測・トレースは丹が整理作業員の協力を得て行った。なお、石器の石材同定については赤崎広志氏（現宮崎県総合博物館）の協力を得た。

5　本書の第１図は、国土地理院発行の５万分の１地形図（「加久藤」「霧島山」）をもとに作成した。

6　本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準じた。

7　本書で使用した方位は国土座標Ⅱ系（世界測地系）の座標北、標高については海抜絶対高で示してある。

8　本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。各遺構番号については通し番号を付した。
　ＳＣ‥‥土坑　　ＳＫ‥‥不明落ち込み

9　遺物図面の縮小率のうち、１：３は原図を 33.3％縮小、２：３は 66.7％縮小したものである。

10　本書の執筆・編集については、平成１９年度に丹、平成２０年度に谷口が行ない、平成２３年度に吉本正典（調査第二課副主幹）が最終的な加筆と編集を行った。

11　出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに
第１節　発掘調査に至る経緯 …… 1
第２節　調査の流れと組織 …… 1
第Ⅱ章　調査の概要
第１節　遺跡の地理的・歴史的環境 …… 2
第２節　発掘調査の経過 …… 3
第Ⅲ章　調査の記録
第１節　調査区の基本層序 …… 5
第２節　遺構
　１．分布 …… 7
　２．土坑 …… 8
　３．性格不明落ち込み …… 8
第３節　出土遺物
　１．縄文時代早期の土器 …… 11
　２．縄文時代後期・晩期の土器 …… 12
　３．縄文時代の石器 …… 14
　４．弥生土器 …… 15
第Ⅳ章　総括
　１．縄文時代 …… 16
　２．弥生時代 …… 17
　３．結語 …… 17

図版 …… 19

挿　図　目　次

第１図　周辺の遺跡 …… 3
第２図　調査地周辺地形図 …… 4
第３図　土層断面模式図及びＪ・Ｋ区土層断面図 …… 5
第４図　遺構分布図 …… 7
第５図　ＳＣ１平面・断面図 …… 8
第６図　ＳＣ２・３平面・断面図 …… 9
第７図　ＳＫ１平面・断面図 …… 10
第８図　縄文土器実測図（１） …… 11
第９図　縄文土器実測図（２） …… 12
第10図　縄文土器実測図（３） …… 13
第11図　縄文時代石器実測図 …… 14
第12図　弥生土器実測図 …… 15

表　目　次

第１表　基本層序及び遺構埋土 …… 6
第２表　縄文土器観察表 …… 13
第３表　石器計測表 …… 14
第４表　弥生土器観察表 …… 15

第Ⅰ章　はじめに

第１節　発掘調査に至る経緯

宮崎県小林土木事務所道路課では、平成 11 年度から地方道路交付金事業南西方道路改良工事を進めている。宮崎県教育庁文化財課では、同事業の京町小林線における道路拡幅工事対象地内に周知の遺跡が存在することを確認したため、平成 17（2005）年４月 11 日に小林土木事務所道路課と文化財課でその取扱いについて協議し、平成 18 年３月２日・３日と平成 18 年６月９日に対面する平木場遺跡とともに確認調査を行い、立野遺跡の内容確認を行った。その結果、縄文時代から弥生時代かけての遺物包含層と竪穴建物跡と考えられる痕跡が検出された。その後、埋蔵文化財保護についての協議を行った結果、現状保存が困難な部分について発掘調査の範囲（約 570 ㎡）を確定して、記録保存の措置をとることになった。

なお、発掘調査は宮崎県埋蔵文化財センターが担当し、同年８月 21 日に着手した。

第２節　調査の流れと組織

立野遺跡の発掘調査および整理作業・報告書作成は下記の組織で実施した。発掘調査は、平成 18（2006）年８月 21 日から 10 月 30 日まで実施した。その後、平成 20 年度に遺物整理と報告書作成を当センターにて行い、平成 23 年度に原稿・図面等の編集と報告書刊行に至る作業を行った。当初、本遺跡の報告は平木場遺跡と併せて行う予定であったが、のちに平木場遺跡は本調査の必要がないと判断されたため、単独での刊行となった。なお、平成 19（2007）年８月 25 日に遺跡発掘速報会「ひむかの歴史 2007」において、一般市民向けの成果の速報を行っている。

調査主体　宮崎県教育委員会　　調査機関　宮崎県埋蔵文化財センター

平成１８年度　発掘・整理作業・報告書作成

所　長	清野　　勉
副所長	加藤　悟郎
総務課長	宮越　　尊
調査第二課長	石川　悦雄
調査第三担当　主事	丹　　俊詞

平成２０年度　報告書作成

所　長	福永　展幸
副所長	加藤　悟郎
副所長兼総務課長	長友　英詞
調査第二課長	石川　悦雄
調査第三担当　主査	谷口　千尋

平成２３年度　報告書編集・刊行

所　長	森　　隆茂
副所長	北郷　泰道
総務課長	坂上　恒俊
調査第二課長	永友　良典
調査第三担当リーダー・副主幹	吉本　正典

第Ⅱ章　調査の概要

第１節　遺跡の地理的・歴史的環境

立野遺跡は宮崎県小林市大字南西方字立野に所在する。付近は市域の南西に連なる霧島山系の麓から石氷川、池島川南岸にかけて広がる扇状地帯であり、東流する石氷川と西流する池島川の分水嶺になっている。北方に池島川に面した低地を望み、北東側で合流する池島川の支流で台地の東と南が囲まれた海抜絶対高で約 300m 前後の台地縁辺部に立地している。

宮崎県小林市は、北は須木村、西はえびの市、東は野尻町、南は高原町と接し、さらに北は熊本県、南は鹿児島県と接する県南西部の要衝である。

市域の北部は九州山地へ連なる山岳地帯、南部は霧島山系に囲まれた内陸盆地であり、北部の山岳地帯は新生代古第三紀の四万十層群、南部の霧島山系は新生代第四紀の霧島火山溶岩で形成されている。霧島山系は合計 23 の火山が並ぶ複合火山群で、標高千メートル級の山々が連なり、幾度となく噴火を繰り返している。市内の土壌は火山灰を基盤とし、ほとんどが姶良カルデラの噴出物であるが、北部には加久藤火山砕屑流もみられる。低平地は大部分が河川の流れによって形成された砂礫台地・三角州低地である。この低地周辺を取り囲んでいるのが火山灰などの火山砕屑流が堆積して形成されたシラス台地であり、市内各地でシラスが厚く堆積した崖を見ることができる。また、シラス台地・沖積地ともに牛の脛火山灰・鬼界アカホヤ火山灰・黒ボクなどの土壌が見られる。黒ボクは霧島火山の噴出物が起源であり、鬼界アカホヤ火山灰は薩摩半島南方約 50 ㎞、屋久島の北部海底に位置する鬼界カルデラの噴出物である。

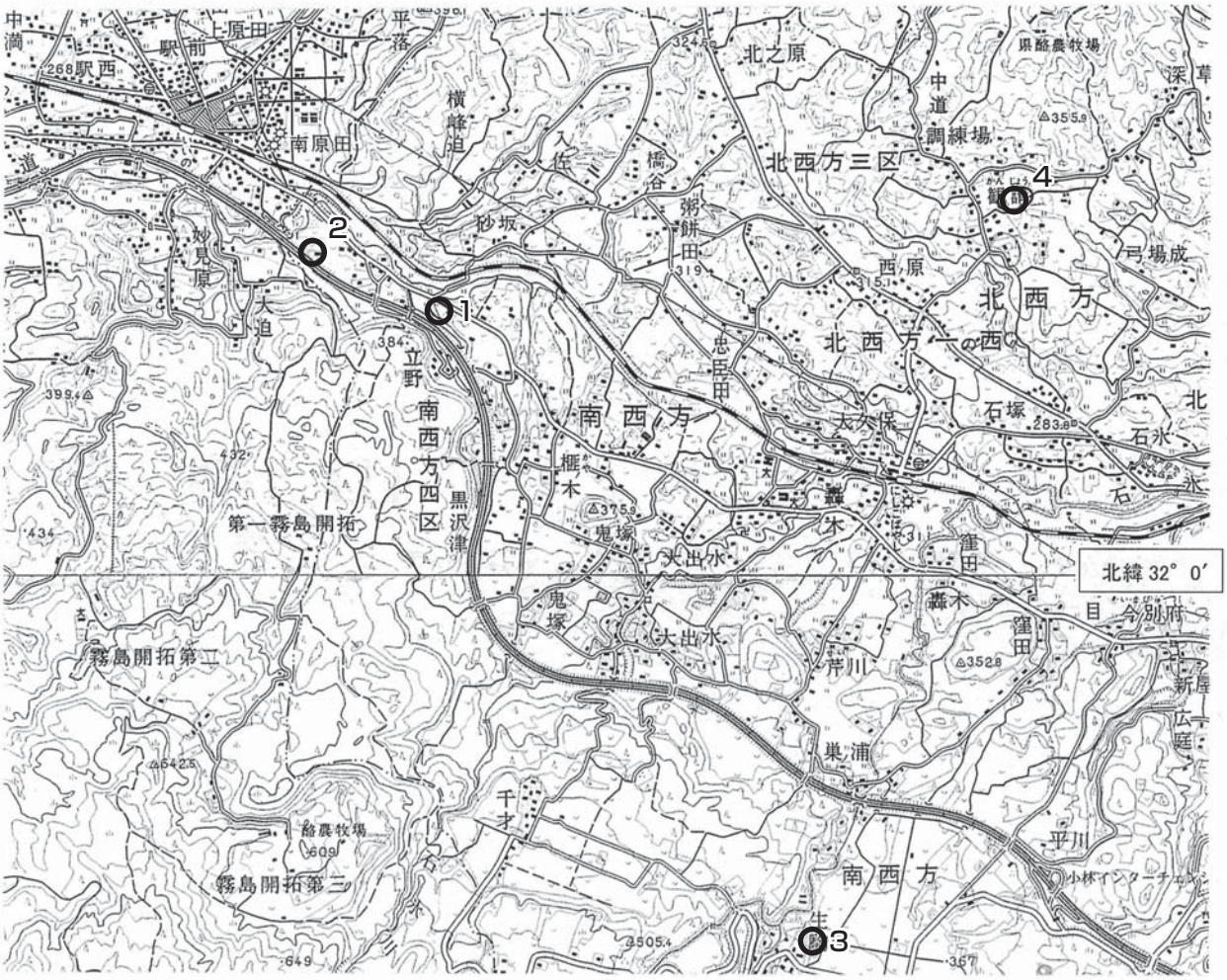
遺跡の周辺においては、主に石氷川や池島川南岸の台地上及び霧島連山北面標高 300 ～ 500m の扇状地上に縄文時代以降の遺跡が分布している。池島川の支流の谷を挟んだ北西方向の台地上には平木場遺跡があり、昭和 47（1972）年に九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の竪穴建物や土師器・須恵器、縄文時代前期の土器などが確認されている（文献１）。

このほか、関連する縄文時代の遺跡として、本田遺跡、こまくりげ遺跡（文献１）、内屋敷遺跡（文献２）、山中前遺跡（文献３）、観請原遺跡（文献５）、梅木原遺跡、永野遺跡（文献６）、生駒遺跡などが知られている。本田遺跡は早期～前期、後期の遺物と竪穴建物跡の一部が確認されており、県指定史跡に指定されている。内屋敷遺跡では早期の平地住居と考えられるピット列や早期が確認され、貝殻文円筒形土器が出土している。観請原遺跡では早期の集石遺構や土坑が検出されており、平栫式土器が少量出土している。また、こまくりげ遺跡では後期の土器が、山中前遺跡では後期から晩期の土器が出土している。

弥生時代については、広庭遺跡、内屋敷遺跡、本地原遺跡（文献７）などで発掘調査が実施され、掘立柱建物跡や花弁形間仕切り住居跡が検出されている。

古墳時代については、上述のとおり平木場遺跡で竪穴建物跡が確認されているほか、東二原遺跡や尾中原遺跡で地下式横穴墓の調査が行われている。

古代以降の遺跡に関しては調査事例が少なく、資料の蓄積が十分とはいえない。水落遺跡では江戸時代の土坑墓が検出され、墓坑内から人骨と銭貨が出土している。なお、「延喜式」の日向国 16 駅の一つ、「夷守駅」の推定地として同市の大字細野字夷守付近が挙げられている。



1　立野遺跡　　2　平木場遺跡　　3　生駒遺跡　　4　観請原遺跡

第１図　周辺の遺跡（1:50,000）

第２節　発掘調査の経過

発掘調査は、平成 18（2006）年６月に文化財課が行った確認調査の結果を受けて、平成 18（2006）年８月から埋蔵文化財センターが実施した。

調査では、まず重機による表土層（Ⅰ層）の除去作業に着手し、その後は人力によって下位層の掘り下げを行った。その結果、調査区西側（約 15 m）は隣接する葡萄畑とほぼ同じレベルまで一段高くなっている部分が現れた。鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層（Ⅱ～Ⅲ層）は、上面で一部削平を受けていたが、いわゆる遺物包含層と考えられ、黒曜石製の剥片（グリッドⅠ）、チャート製の石匙（グリッドＪ）、弥生時代中期の土器片（グリッドＢ）などが出土した。そのうちの遺物 91 点について位置を記録して取り上げを行った。その後、さらに掘り下げていくと、Ⅱ～Ⅲ層の下位で鬼界アカホヤ火山灰の一次堆積層（Ⅴ層）が確認できた。

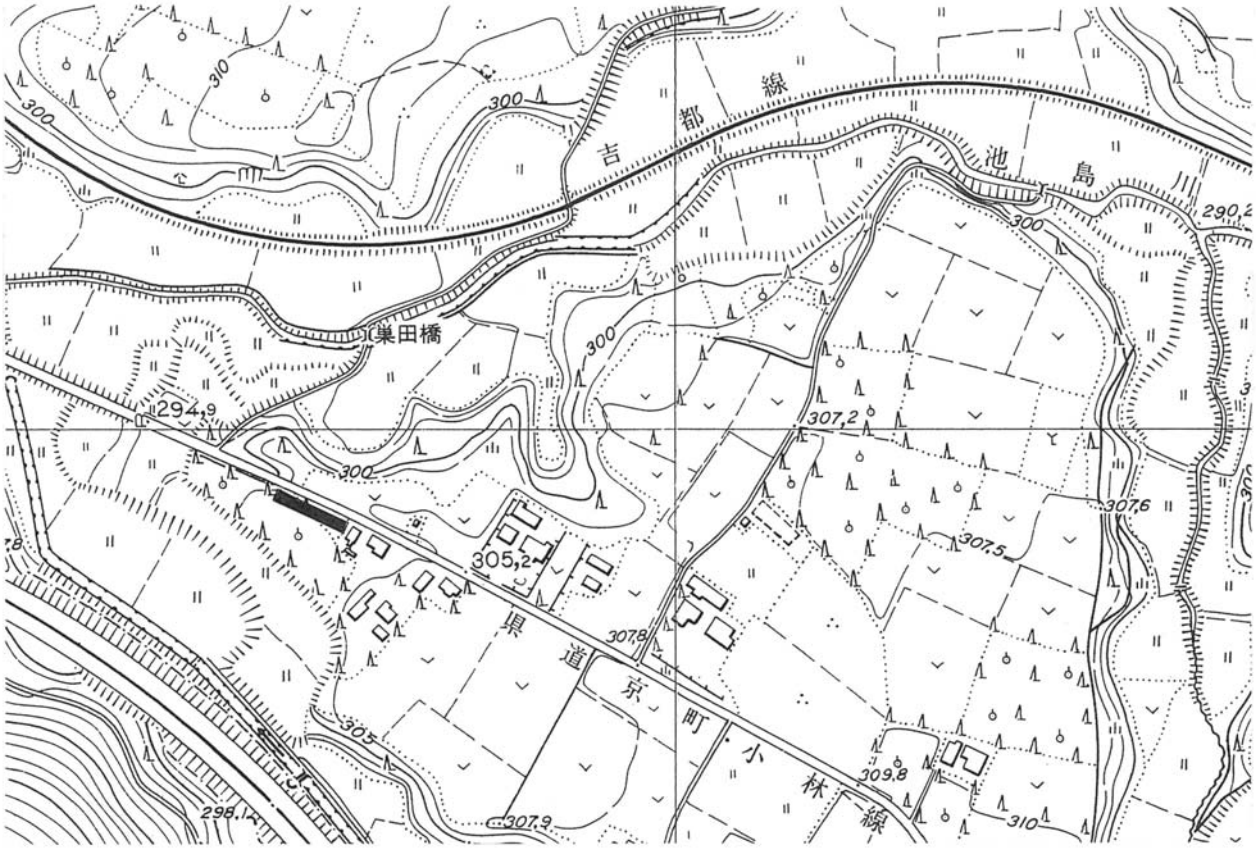
遺構の検出作業はⅤ層上面で行うとともに、コンターラインを測量して作成した。その結果、県文化財課の試掘から調査当初まで竪穴建物跡と考えられていた遺構については、最終的に攪乱によって一部が削平された性格不明の落ち込みと判断した。その他、土坑３基、ピット数基を検出した。その後、Ⅴ層の掘り下げを行い、下部の出土遺物 33 点について位置の記録の後、取り上げを行った。これらは「Ⅴ層出土」と記録されているが、Ⅴ層とⅥ層の層界付近の出土と判断される。グリッドＩ・Ｊでは牛の脛火山灰層（Ⅵ層）を掘り下げ、石鏃、黒曜石の剥片や撚糸文が施された縄文土器片など出土遺物 50 点について位置を記録して取り上げた。

さらに、下層の堆積状況と遺構、遺物出土状況を確認するためにトレンチを数箇所設定して掘り下げを行った。グリッドＪ・Ｋでは、褐色土層（Ⅶ層）上面まで掘り下げ、縄文土器や剥片など遺物３点が出土した。グリッドＧ・Ｆでは、Ⅵ層より下位層で遺構は検出されず、遺物も出土しなかった。最後に、旧石器時代の遺構・遺物を確認するためにグリッドＪでトレンチを設定し、Ⅶ層より下位層の掘り下げを行ったが遺構・遺物は確認されなかった。遺構・遺物の検出状況等の写真撮影や図化記録は調査員が随時行った。

空中写真撮影は同年 10 月 11 日に遺構精査を行ったⅤ層上面で行った（委託業務）。

プレハブの撤去は同年 10 月 26 日、重機による調査区の埋め戻しは同年 10 月 30 日に行い、調査の全工程を終了した。

なお、図面作成や遺物取り上げなどの記録作業に供するため、５m四方のグリッドを調査区域すべて包括するように設定した。東西方向にアルファベット、南北方向に算用数字を付して、第４図のように組み合わせて示した。



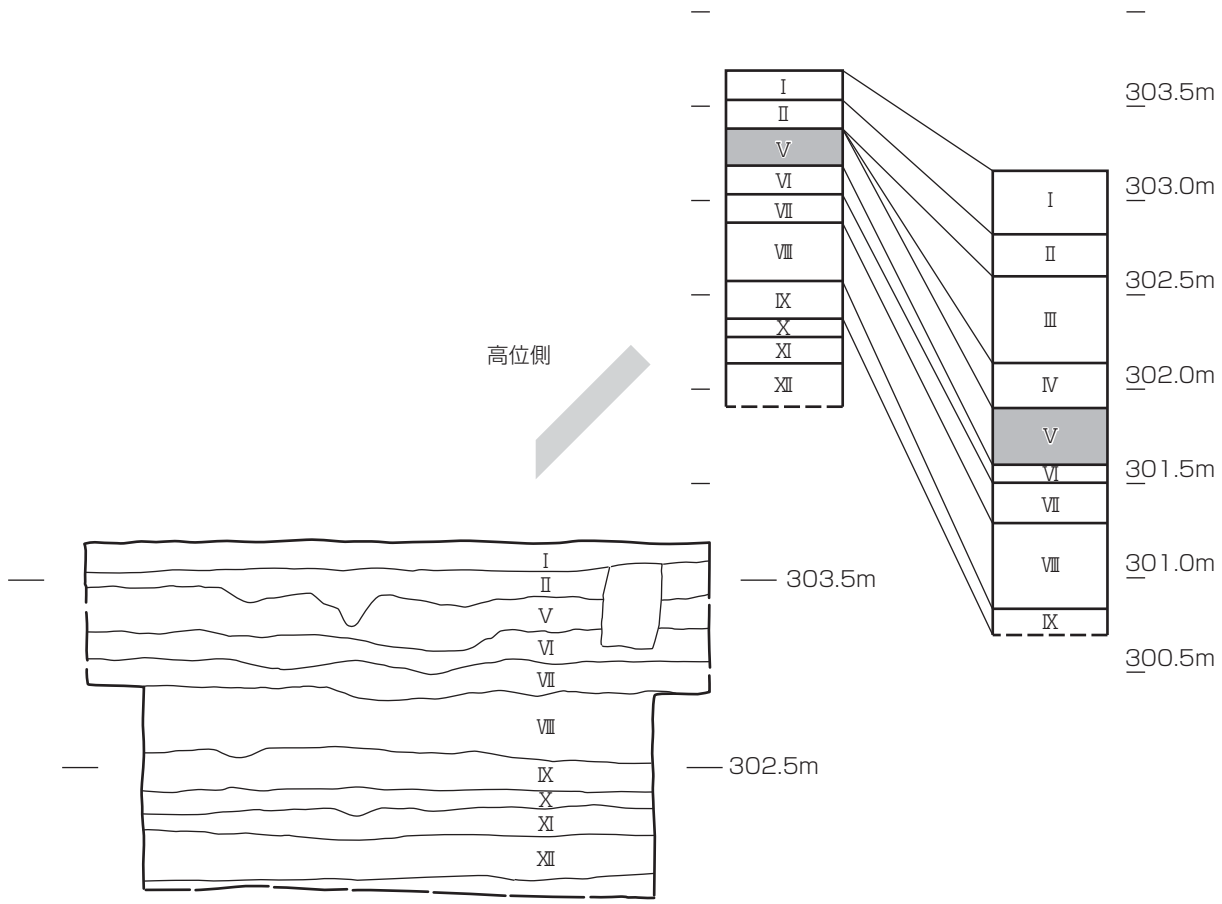
第２図　調査地周辺地形図

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　調査区の基本層序

調査対象地の現況は、ほぼ平坦に削平された後、主に畑として利用され、東側の一部は民家となっていた。立野遺跡の基本層序は第１表に示したとおりである。本調査区は東西に細長く（約 55 × 7 m）、西と東では後世による削平や地形によって堆積状況が若干異なる。調査区西側（約 15 m）において、隣接する葡萄畑とほぼ同じレベルまで一段高くなっていた部分については、その後の調査によって旧地形の尾根の先端部と考えた。また、アカホヤ火山灰層（Ⅴ層）については、東側で現地表面から約２m、西側では約 0.1 m下で検出され、東側ほど次第に低くなるが、東端部では高く、北側ほど低くなっている谷地形が確認できた。また、その谷地形の部分ではⅤ層の上に、牛の脛火山灰層（Ⅳ層）が確認できた。Ⅴ層より下位の層の堆積状況は調査区全体においてほぼ同様であった。出土遺物から、Ⅲ層は縄文時代後期以降、Ⅴ～Ⅵ層は縄文時代早期の層であると考えられる。

第３図は調査区南壁での土層堆積状況を示した断面模式図、第１表は基本土層の所見である。第１表には後述する遺構の埋土も記している。



第３図　土層断面模式図及びＪ・Ｋ区土層断面図

第１表　基本層序及び遺構埋土

層	層厚（cm）	色調	特　　徴
Ⅰ	15 ～ 40	―	表土。耕作土など。
Ⅱ	10 ～ 40	褐色（Hue10YR4/4）	鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層。ややしまりがある。粘性は低い。炭化物をごくわずかに含む。
Ⅲ	25 ～ 50	褐色（Hue10YR4/6）	Ⅱ層と同じく鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層。ややしまりがあり、鬼界アカホヤ火山灰（Hue7.5YR5/8）のブロックを含む。
Ⅳ	20 ～ 40	にぶい黄褐色（Hue10YR5/4）	牛の脛火山灰層である。ややしまりがあり硬く、粘性がある。径１～ 5mm 大の鬼界アカホヤ火山灰（黄褐色 Hue10YR5/8）を含む。
Ⅴ	20 ～ 40	明褐色 (Hue7.5YR5/8)	鬼界アカホヤ火山灰の一次堆積層。
Ⅵ	10 ～ 20	黄灰色（Hue7.5YR4/1）	牛の脛火山灰層。ややしまりがあり硬く、粘性が強い。
Ⅶ	10 ～ 30	褐色 (Hue7.5YR4/3)	しまりがあり硬く、粘性大。径１～３cm の褐色土のブロックを含む。
Ⅷ	25 ～ 50	黒褐色（Hue7.5YR2/2）	しまりがあり硬く、粘性大。
Ⅸ	10 ～ 20	暗褐色（Hue7.5YR3/4）	しまりがあり非常に硬い。
Ⅹ	10	褐色（Hue7.5YR4/4）	Ⅸ層より明るい。しまりがあり非常に硬い。
ⅩⅠ	10 ～ 20	黄褐色（Hue10YR5/8）	しまりがあり非常に硬い。径１～５mm の褐灰色（Hue10YR4/1）のブロックや黄褐色（Hue10YR7/8）土を含む。
ⅩⅡ	５～	明黄褐色（Hue10YR6/8）	しまりがあり硬い。粘性は小。

遺構	細分層	色調	特　　徴
ＳＣ１	1	褐色（Hue10YR4/6）	３mm 程の焼土や微細な炭化物を全体に含む。やわらかい。
	2	褐色（Hue10YR4/4）	5mm 程の明黄褐色土を含む。
	3	褐色 (Hue7.5YR4/4)	やわらかい。
	4	褐色 (Hue7.5YR4/3)	明黄褐色のブロック混入。
ＳＣ３	１ａ	黄褐色 (Hue2.5YR5/4)	鬼界アカホヤ火山灰をベースとする。粗くしまりない。炭化物を多く含む。
	１ｂ	黄褐色 (Hue2.5YR5/4)	１ａと比べて二酸化ケイ素を多く含み白っぽい。１ａ・ｂは後世の掘り込みか。
	2	暗褐色 (Hue10YR3/3)	ＳＣ３掘削による焼土ブロックを約５％含む。
	3	暗褐色 (Hue10YR3/4)	二酸化ケイ素を若干含む。
	4	暗褐色 (Hue10YR3/4)	３に似るがやや湿り気が多い。
ＳＣ２	5	にぶい黄褐色 (Hue10YR5/4)	粗く、ややもろい。５～ 15mm 大の焼土ブロックを多く含む。
	6	赤褐色 (Hue5YR54/6)	焼土ブロックのもとになる。二酸化ケイ素を多く含みざらざらしている。
ＳＫ１	1	黒褐色 (Hue10YR2/2)	しまりなく、やわらかい。
	2	黒褐色 (Hue10YR3/2)	２～ 3mm の鬼界アカホヤ火山灰が少量混入。しまりなく、やわらかい。
	3	暗褐色 (Hue7.5YR4/4)	1mm の鬼界アカホヤ火山灰が少量混入。しまりあり。
	4	にぶい黄褐色 (Hue10YR4/3)	しまりない。
	5	灰黄褐色 (Hue10YR4/2)	しまりなく、非常にやわらかく、粗い。明褐色（Hue10YR6/6）土の砂粒を含む。
	6	黒褐色 (Hue10YR3/2)	２とほぼ同質。

第２節　遺構

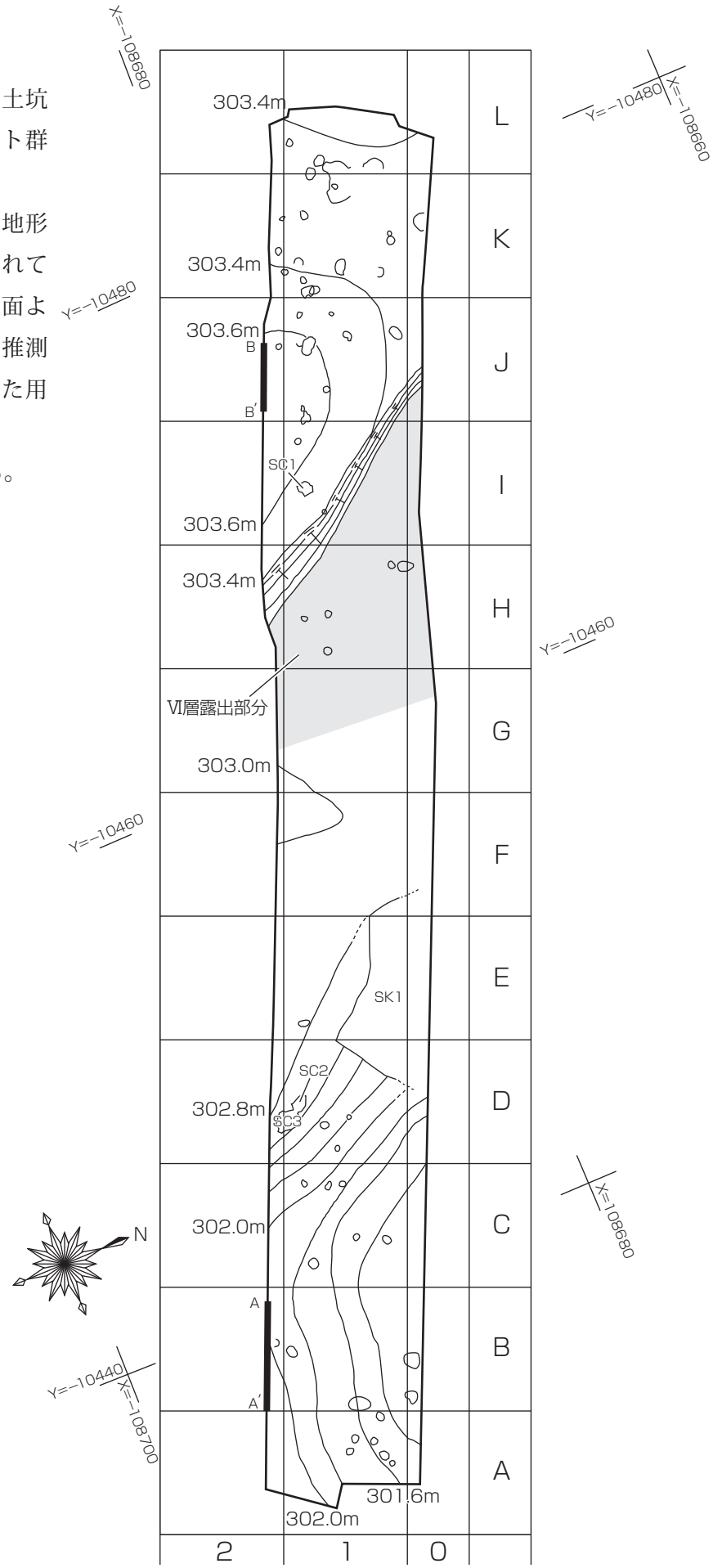
１　分布

基本層序Ⅴ層及びⅥ層上面において土坑３基と性格不明落ち込み１基及びピット群を検出した。

遺構は調査区東側と西側において旧地形の比較的傾斜が緩やかな場所に構築されていた。ただし、どの遺構も検出された面より縄文時代から弥生時代に帰属すると推測されるが詳細な時期は不明である。また用途も判然としない。

検出位置は第４図に示すとおりである。

＊１グリッドは５ｍ。
＊Ⅴ層上面での等高線と検出遺構。ただし網掛け部はⅥ層上面での検出遺構である。



第４図　遺構分布図

２　土坑

ＳＣ１（第５図）はグリッドＩに位置する遺構である。長軸約 0.56 m、短軸約 0.4 mで、遺構検出面の鬼界アカホヤ火山灰層（Ｖ層）上面からの深さは約 0.47 mである。床面から二段掘り状に掘られており、最深部は狭く、平坦面はほとんどみられない。埋土には３㎜程の焼土や微細な炭化物を含む。出土遺物はほとんどなく、遺物１点を取り上げたのみである。このため、時期や用途は不明である。

ＳＣ２とＳＣ３（第５図）はグリッドＤで南北方向に連なる形で位置する。

ＳＣ２は長軸約 0.66 m、短軸約 0.48 mで、検出面の鬼界アカホヤ火山灰層（Ｖ層）の上面からの深さは約 0.26 mである。ＳＣ２は南側に位置するＳＣ３に切られる。

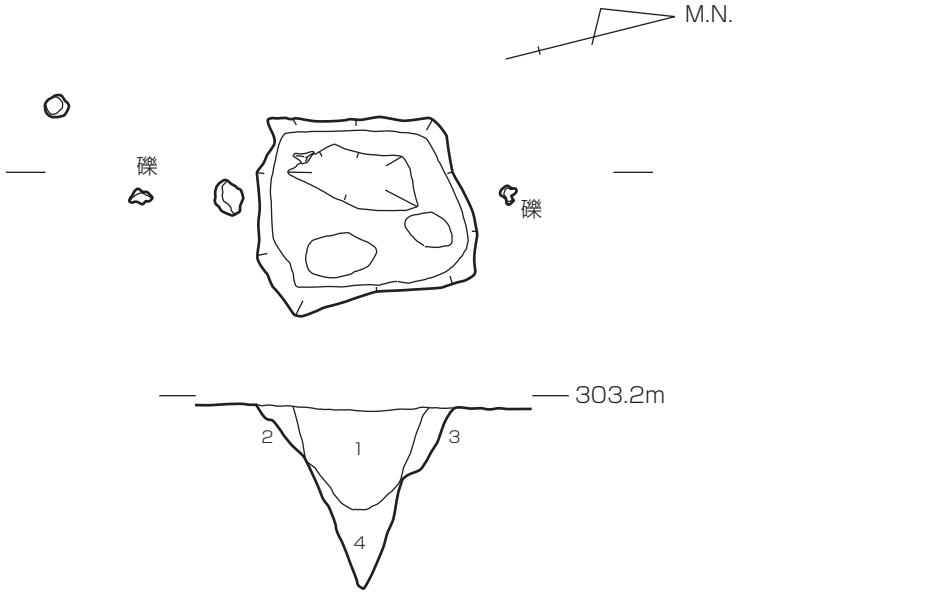
ＳＣ３は長軸約 0.80 m、短軸約 0.68 m、検出面であるＶ層上面からの深さは約 1.28 m。ＳＣ３は形成後に後世の遺構構築に伴う掘削を受けている。

ＳＣ２及びＳＣ３からは遺物は出土していない。

３　性格不明落ち込み

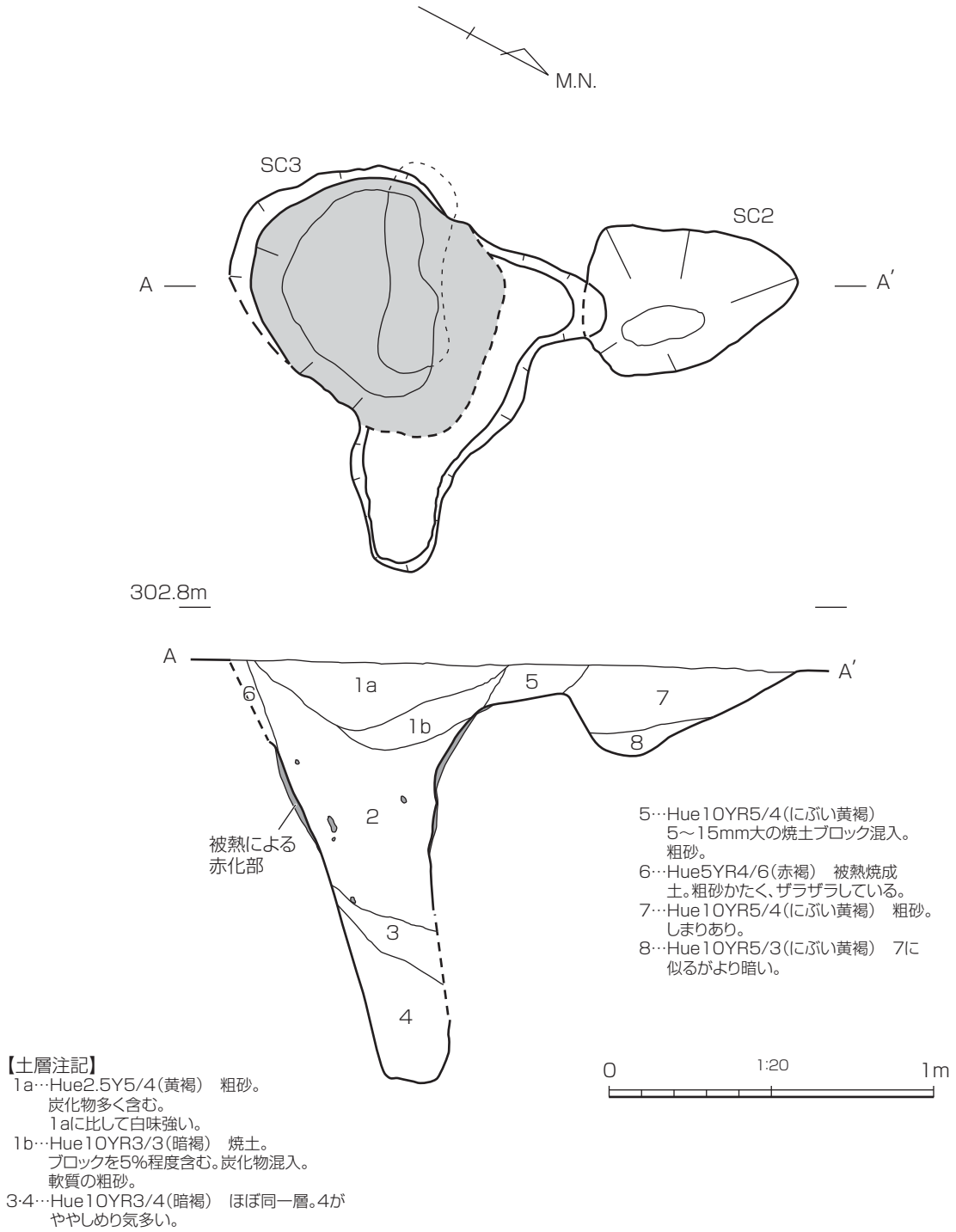
ＳＫ１（第６図）はグリッドＤ～Ｅの調査区北壁寄りに位置する遺構である。その規模は長軸約７ m、短軸約４ mで、方形を呈すると推定される。

試掘から調査当初にかけては竪穴建物跡と考えていたが、遺構に伴う遺物が少なく（取り上げた遺物点数は５点）、北側部分が攪乱による削平（約１ m）を大きく受けており、竪穴建物として積極的に判断できるデータが得られず、その性格が判然としなかったため、最終的には「不明落ち込み」とした。



【土層注記】
1…Hue10YR4/6（褐）　3mm程の焼土粒。
炭化物混入。やわらかい。
2…Hue10YR4/4（褐）　明黄褐色ブロック混入。
3…Hue7.5YR4/4（褐）　やわらかい。
4…Hue7.5YR4/3（褐）　3～5mmの明黄褐色ブロック。
混入。かたくしまる。

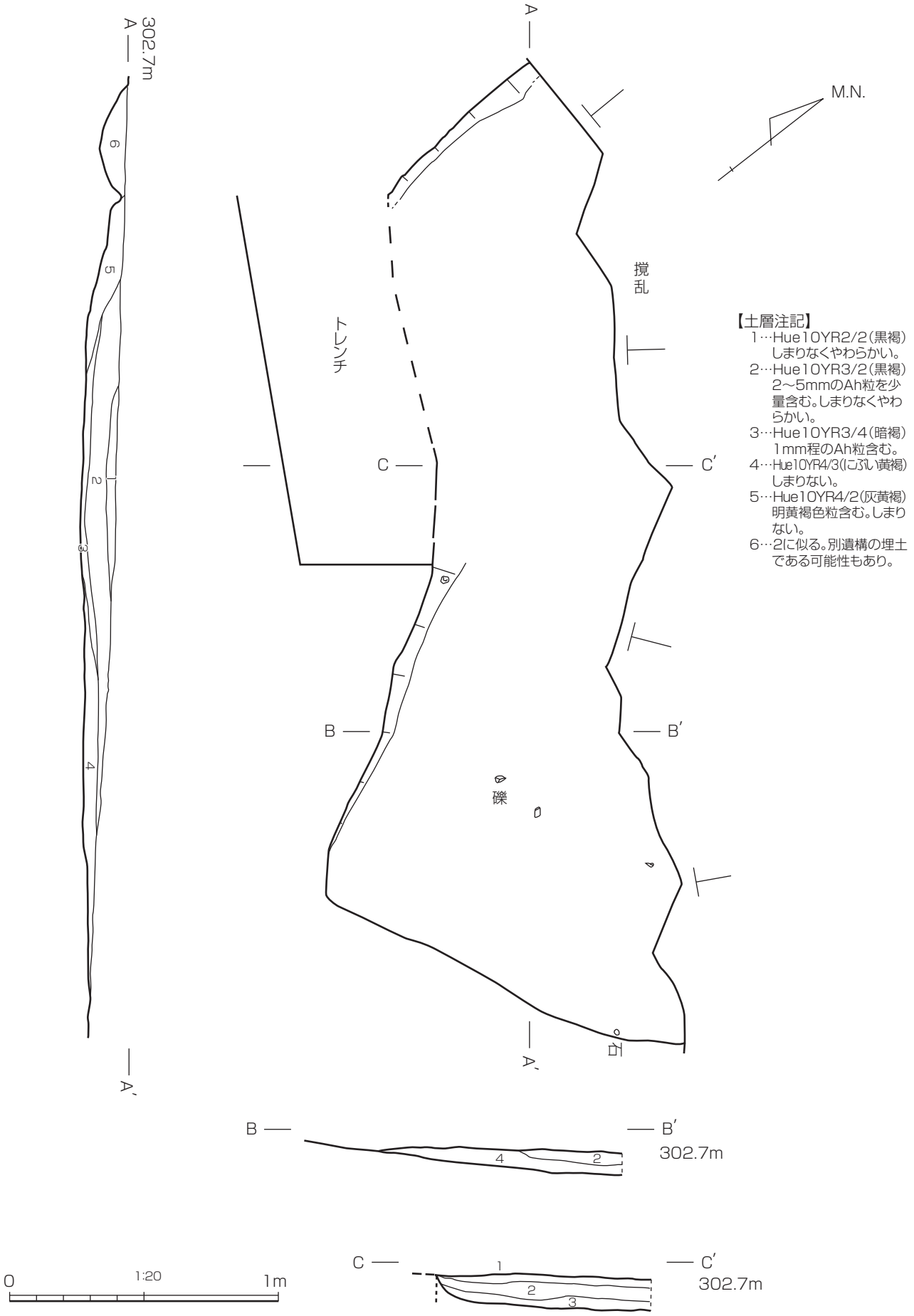
第５図　ＳＣ１平面・断面図



第６図　ＳＣ２・３平面･断面図

埋土はレンズ状となる自然堆積の状況を示しており、堆積の初段階である下層は黄褐色・にぶい黄褐色を、埋没の最終段階である上層は黒褐色を呈する。検出面から最深部までの深さは約 0.25 mである。

出土遺物の中で図化可能なものは無い。１点のみススの付着する甕形土器の胴部片と思われる個体があり、おそらくは後述する弥生土器と近接する時代の遺構と考えられる。



第７図　ＳＫ１平面･断面図

第３節　出土遺物

主にⅥ層より縄文時代早期の遺物が出土している。特に集中するのは調査区西部であり、Ⅵ層上部で平栫式土器・撚糸文系土器やチャート、黒曜石の剥片類が出土している。

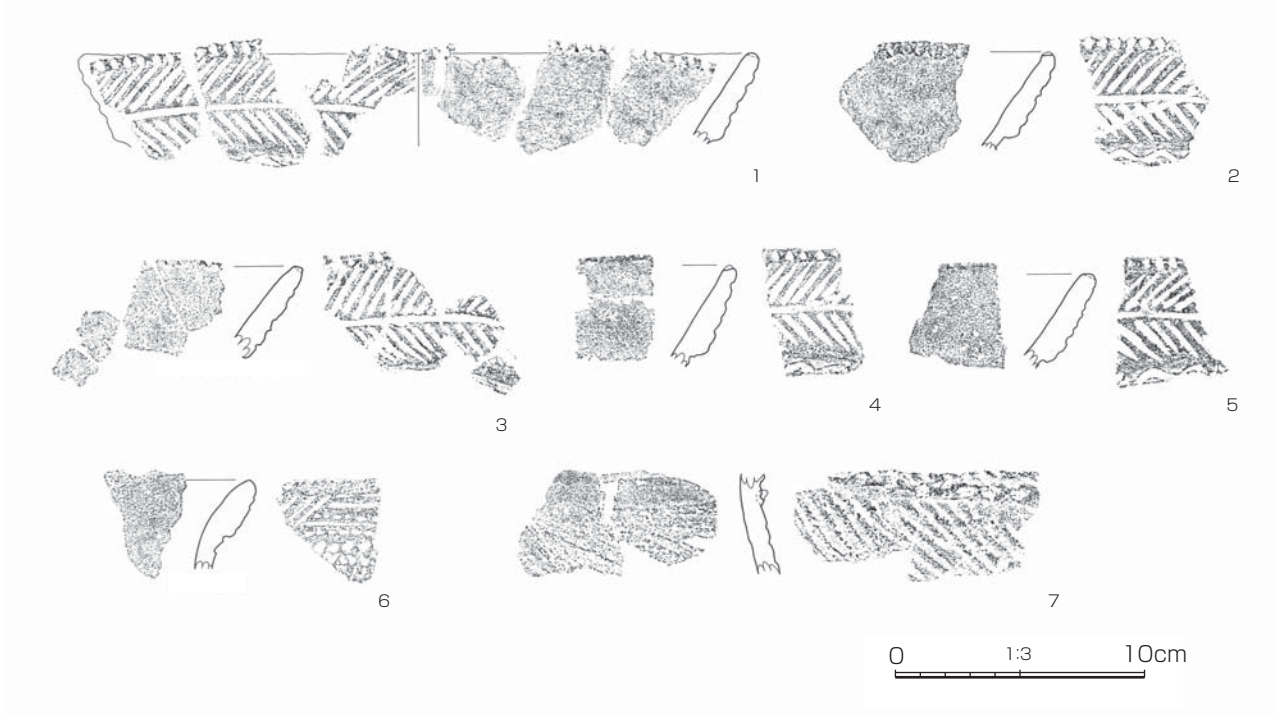
またⅢ層より縄文時代前期と後期から晩期にかけて、及び弥生時代中期の土器片が少量出土している。

１　縄文時代早期の土器

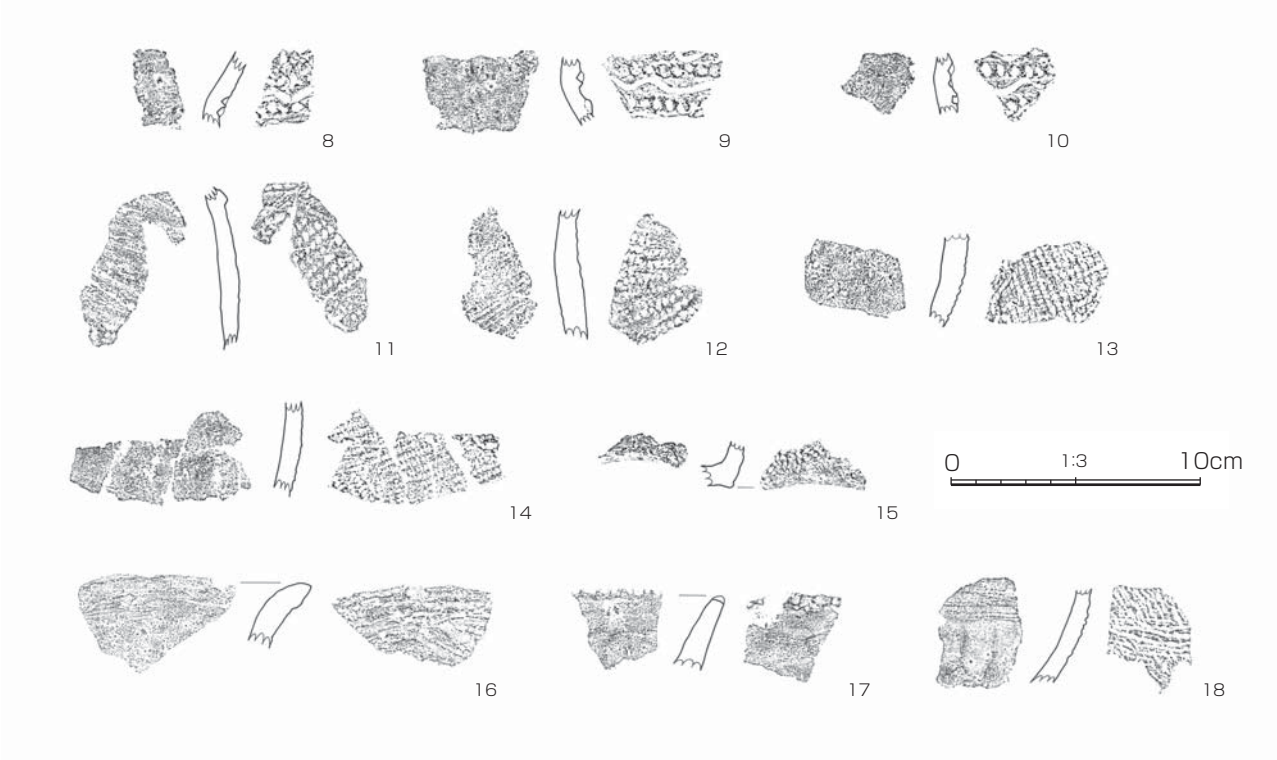
平栫式と呼ばれる一群の比率が最も高い。第７図と第８図の８～15がそれに該当するものである。多くはⅥ層より出土しており、上述の出土状況からみて、鬼界アカホヤ火山灰層の下位にあたるⅥ層上部が本来の垂直位置と考えられる。

全体の形状を復元できる資料はないが、器形の面では口縁部がわずかに肥厚し、外に開くこと、頸部が絞まりそこに突帯を巡らせること、胴部が膨らむこと、文様の面では多くが地文としての縄文を施し、直線、波線をなす沈線文、列点文を併用すること、口唇部に刻目を入れることなど、一般的な平栫式の特徴を備えている。縄文は２段の原体を用いた単節のものである。7は撚りの関係からか節が明瞭でなく、撚糸文に似た地文となっている。11と13には縦方向の結束縄文が認められる。15は平底をなす底部であろう。

16と17は無文の口縁部である。16は図上では肥厚しているように表現しているが、実際はごくわずかに段が認められる程度である。口唇部に刻みを入れる。17は口径の復元はできないが、比較的小形の個体であり、壺形土器であった可能性もある。16はⅤ層下部、17はⅥ層出土。18は不定方向の撚糸文を施す個体である。Ⅵ層出土。



第８図　縄文土器実測図（１）



第９図　縄文土器実測図（２）

２　縄文時代後期・晩期の土器

Ⅲ層から出土した土器をまとめて掲載する（第９図）。

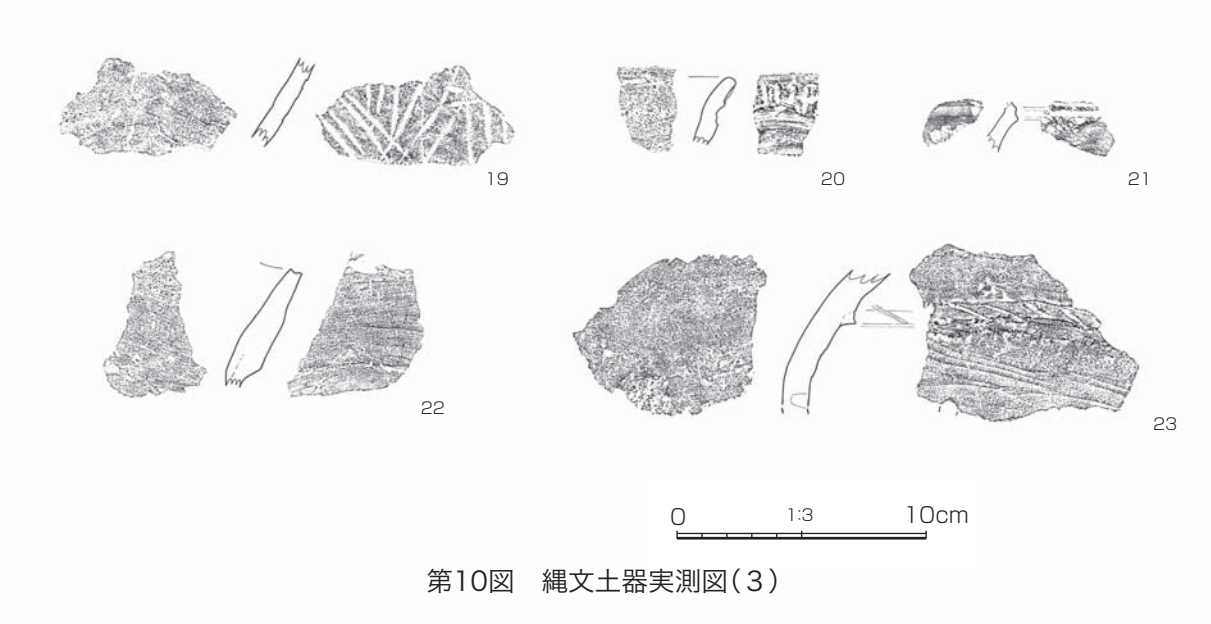
19 は沈線文を施すもので、おそらくは鉢形を呈する土器の底部に至る部位であろう。前期曽畑式の新しい段階の所産と推定したところであるが、沈線文は平栫式にもみられること、胎土の特徴が似ることから、Ⅵ層が原位置であった破片が上層に混入した可能性も排除できない。その一方で、平栫式とするには横方向の区画沈線を欠き、平行でなく乱れ気味の沈線文であること、ボウル状に近い器形と推定されることなど違和感があり、むしろ曽畑式系との親縁性が感じられる。鬼界アカホヤ火山灰層の二次堆積層であるⅢ層出土である点もこの型式比定と整合する。

20 は貝殻腹縁の圧痕文と広めの沈線文を施す口縁部片である。縄文や擬似縄文は確認できない。後期前葉の在地系土器と考えられる。

21 は内面に短く屈曲し文様帯を形成する口縁部片で、横方向の沈線文を巡らせる。後期中葉～後葉の所産と考えられる。

22 は波状をなす口縁部片で、端部を肥厚させる形状となる。焼成が良くひときわ堅緻である。

23 は突帯の付く深鉢。おそらくは口縁部下部の破片であろう。突帯は断面三角形を呈し、上半に短沈線を施す。沈線文としては浅く、刻目に近い印象を受けるが、全てが突帯の頂部に届いておらず、一般的に言うところの刻目とは異なる。頸部付近は繊維痕の残る工具ナデが施される。また孔列文の可能性のある貫通しない円孔が１箇所認められる。頸部付近のみの個体であるが、おそらくは胴部が屈曲する形態のものと考えられる。



第10図　縄文土器実測図（３）

No.	出土層	手法・調整・文様等の特徴		色調		胎土中に含まれる粒の特徴	備考
		外面	内面	外面	内面		
1	Ⅵ	木の葉状凹線文 波状凹線文	ナデ（斜・横位）	黄褐・暗灰黄	にぶい黄	1㎜前後の白色粒、1㎜以下の光沢のある黒色･透明粒	口唇部：連続刻目文
2	Ⅵ	木の葉状凹線文 波状凹線文	ナデ（斜・横位）	暗灰黄	にぶい黄橙	1㎜前後の白色粒、1㎜以下の光沢のある黒色･透明粒	口唇部：連続刻目文
3	Ⅴ・Ⅵ	木の葉状凹線文	ナデ（斜・横位）	にぶい黄・黄褐	浅黄・灰黄	1㎜前後の白色粒、1㎜以下の光沢のある黒色･透明粒	口唇部：連続刻目文
4	Ⅴ・Ⅵ	木の葉状凹線文 波状凹線文	ナデ	浅黄・灰	浅黄・ にぶい黄	1㎜以下の白・褐・光沢のある黒色・透明粒	口唇部：連続刻目文
5	Ⅴ・Ⅵ	木の葉状凹線文 波状凹線文	ナデ	にぶい黄橙	浅黄	1㎜前後の白・褐色粒、１㎜以下の光沢のある透明粒	口唇部：連続刻目文
6	GTr	凹線文（斜位） 連点文列点文 連続刺突文	ナデ	橙	橙	1㎜以下の灰白・褐色粒、微細な光沢のある黒色・透明粒	
7	Ⅵ	縄文（斜位）	ナデ ケズリ（斜位）	黒褐	明褐・ 灰黄褐	1㎜以下の灰白・褐・赤褐・光沢のある透明粒	外面：貼付刻目突帯文
8	Ⅵ	連続刺突文 波状凹線文　縄文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	５㎜程度の褐色粒、１㎜以下の白・褐・光沢のある黒色・透明粒	
9	Ⅵ	連続刺突文 波状凹線文	ナデ	にぶい黄	にぶい黄	1㎜以下の白・褐・光沢のある黒色・光沢粒	
10	Ⅵ	連続刺突文 波状凹線文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	1㎜以下の白・光沢のある黒色・透明粒	
11	Ⅴ	縄文	条痕文	にぶい橙・ 黄灰	黄灰・ にぶい褐	1㎜以下の灰白・光沢のある黒色・透明光沢粒	外面：貼付刻目突帯文
12	Ⅵ	縄文？（斜・横位）	ナデ	明褐・褐灰	明褐	1㎜以下の灰白・褐灰・褐・光沢のある黒色・透明粒	外面：黒斑あり
13	Ⅵ	縄文（斜位・波状）	ナデ	にぶい赤褐・ 褐	にぶい赤褐	２～３㎜大の赤褐・褐色粒、１㎜以下の灰白・褐色粒、微細な光沢のある透明粒	
14	Ⅴ・Ⅵ	縄文（斜位）	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	２㎜程度の褐灰色粒、１㎜以下の灰白・褐・黒色・光沢のある透明粒	
15	Ⅵ	縄文（斜位）	ナデ	褐	赤褐	1㎜以下の灰白･褐色粒､1㎜以下の光沢のある透明粒	
16	Ⅴ	条痕文（斜・横位）	ナデ（斜・横位） 指押さえ痕	褐・黒褐	にぶい褐・ 黄灰	1㎜以下の灰白・褐・黒色・光沢のある透明粒	内面：黒斑あり
17	Ⅳ	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	１～２㎜の褐色粒、１㎜以下の白・黒色粒、微細な光沢のある黒色・透明粒	口唇部：連続刻目文
18	Ⅵ	縄文（斜・横位）	ナデ	明褐・褐灰	明褐	1㎜以下の灰白・黒色粒、微細な光沢のある透明粒	外面：黒斑あり
19	Ⅲ	凹線文（斜位交錯）	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐・ 暗灰黄	1㎜以下の灰白・褐・黒・光沢のある黒色・透明粒	外面：煤
20	Ⅲ	貝殻刺突文（縦位） 押線文？　ナデ	ナデ	褐	にぶい黄褐・ 黒褐	1㎜以下の白・黒色粒、微細な光沢のある透明粒	
21	Ⅲ	ナデ（沈線文）	ナデ	黄褐	暗灰褐	1㎜以下の白・黒色粒、微細な光沢のある透明粒	
22	Ⅲ	ナデ	ナデ	褐・黒褐	にぶい赤褐・ 褐	1㎜以下の灰白･褐･黒色粒､微細な光沢のある透明粒	口唇部：刻目文
23	Ⅲ	ナデ 工具痕？	ナデ	にぶい黄・ 黄灰	にぶい黄・ 黄褐	３㎜大の灰白粒、１㎜以下の灰白・褐灰粒、微細な光沢のある黒色・透明粒	外面：貼付刻目突帯文 黒斑

第２表　縄文土器観察表

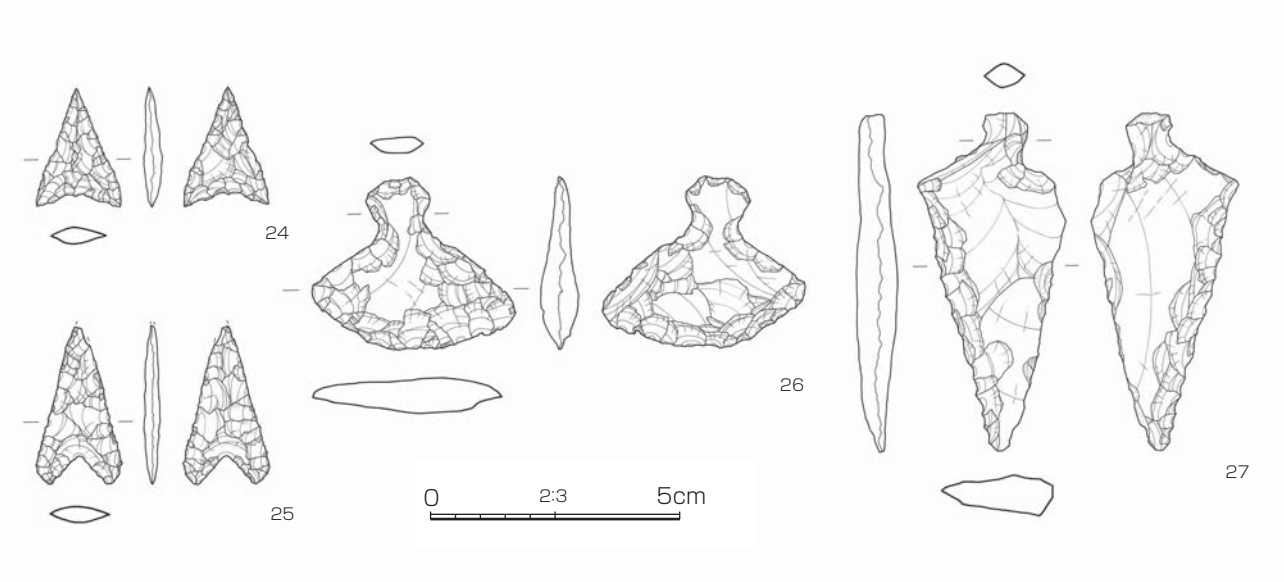
3　縄文時代の石器

約 50 点出土している。チャートや黒曜石の剥片が比較的多くみられた。ここでは製品の 4 点のみを図化した（第 11 図）。土器と同様に「Ⅵ層出土石器」と「Ⅲ層出土石器」に分類する方法もあったが、遺物の性格上、Ⅲ層出土といえども早期のものが混入する可能性が排除できないため、ここでは一括して扱っている。

打製石鏃は 2 点出土している（24・25）。どちらも平面形態は二等辺三角形で、基部形態は凹基式である。24 はⅢ層から出土した長崎県針尾産系の黒曜石製であり、凹部の抉りは浅い。両側辺は基部付近でやや外湾し、先端部に向かって直線的に延びている。25 はⅤ層下部出土の緑黒色のチャート製であり、凹部の抉りは深い。

石匙も 2 点出土している（26・27）。26 はⅢ層出土。いわゆる横型で、両面に丁寧な調整が施されている。刃部とつまみ部が左右非対称である。石材は石英で、全体的に灰白色を呈している。27 はいわゆる縦型のもので、片側辺部の両面には丁寧な調整が施されている。石材は佐賀県多久産と考えられるサヌカイトで、全体的には黒褐色を呈している。

以上の他、チャートや黒曜石、サヌカイト製の剥片が一定量出土している。またチャート製の石核が 1 点認められる。



第11図　縄文時代石器実測図

No.	出土層	器種	計測値（mm）			石材	備考
			最大長	幅	厚さ		
24	Ⅲ	石鏃	24	17	3	黒曜石（長崎県針尾系）	
25	Ⅴ下部	石鏃	32	17	3	チャート	先端欠損（長さは残存長）
26	Ⅲ	石匙	41	34	7	石英	
27	Ⅰ	石匙	67	30	8	サヌカイト（佐賀県多久産か）	

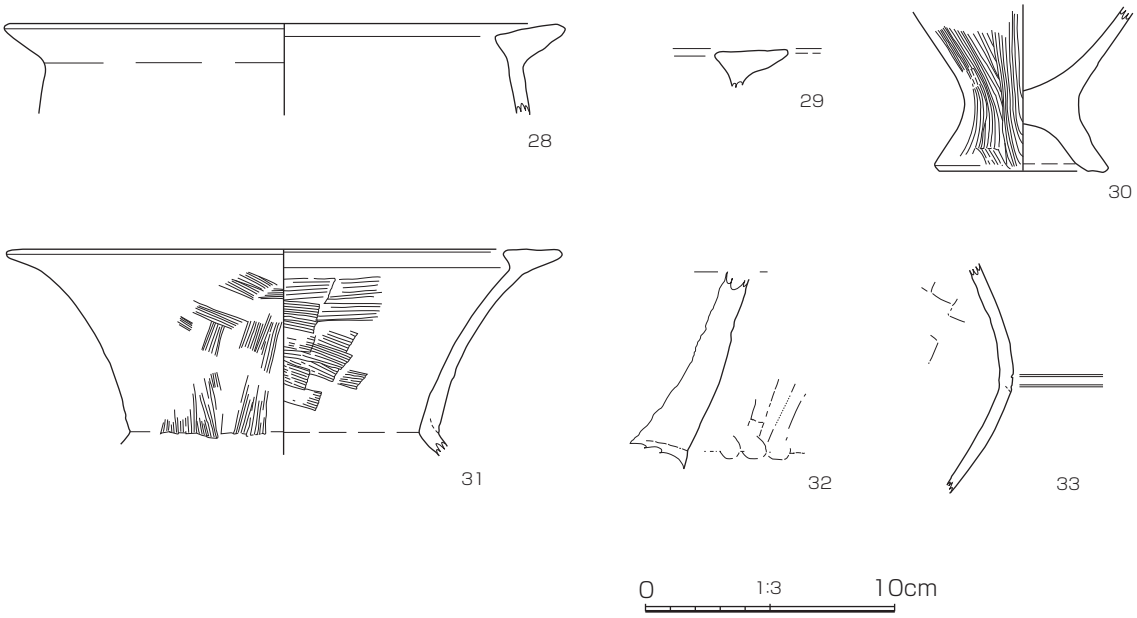
第３表　石器計測表

4　弥生土器

全てⅢ層より出土している。いずれも破片で、さほどまとまりはない。色調や胎土などの特徴は似通っており、器面はにぶい黄橙色を呈する。

28 と 29 は断面逆Ｌ字に屈曲する甕形土器の口縁部付近。いずれも口縁部の端部付近はヨコナデ調整が施される。28 は復元口径 12.4 ㎝。外面・内面の調整はナデである。同様の口縁部形態を有する 29 と比べて、28 はやや立ち上がり気味となる。30 は中空となる甕形土器の底部である。外面には縦位の丁寧なハケ目調整が施されている。内面はナデ調整が施されており、黒色化した部分も認められる。推定底径は 6.9 ㎝である。32 は甕形土器の胴下部である。外面は斜位のナデ調整が施される。内面は剥離して調整は不明である。

32 は壺形土器の口縁部から頸部にかかる部分である。口縁部は鋤先状を呈する。外面には斜・横位のハケ目が施されている。内面には横位のハケ目、34 は壺形土器の胴部である。外面はナデ調整であり、最大径部分に２条の横位の並行沈線が施される。内面は風化気味であるがナデ調整と絞り痕らしき箇所が見受けられる。



第12図　弥生土器実測図

No.	出土層	器種	部位	推定法量（㎝）	手法・調整・文様等の特徴		色調		胎土中に含まれる粒の特徴	備考
					内面	外面	内面	外面		
28	Ⅲ	甕	口縁部	口径 12.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	明黄褐・暗灰黄	1㎜以下の灰白・褐・黒色粒、微細な光沢のある黒色・透明粒	
29	Ⅲ	甕	口縁部	－	ナデ	ナデ	黒褐	明黄褐・暗灰黄	1㎜以下の灰白・褐・黒色粒、微細な光沢のある黒色・透明粒	
30	Ⅲ	甕	胴～底部	底径 6.9	ハケ目（縦位）	ナデ	にぶい黄橙・暗灰黄	にぶい黄橙・にぶい橙	1㎜以下の灰白・褐・黒・光沢のある黒色・透明粒	
31	Ⅲ	壺	口縁～頸部	口径 12.2	ハケ目（横位）	ハケ目（横・斜位）→ナデ	にぶい黄橙	浅黄・暗灰黄	3㎜大の灰白色粒、1㎜以下の灰白・褐色粒、微細な光沢のある透明粒	
32	Ⅲ	甕	胴部	－	不明（剥離）	工具痕（斜位）	にぶい黄橙・にぶい橙	にぶい黄・にぶい橙	1㎜以下の灰白・褐灰・褐、光沢のある黒色・透明粒	
33	Ⅲ	壺	胴部	－	ナデ（風化気味）	ナデ　沈線（2条）	にぶい黄橙	にぶい黄橙	2㎜大の灰白粒、1㎜以下の灰白・褐色粒、微細な光沢のある透明粒	

第４表　弥生土器観察表

第Ⅳ章　総括

今回の調査で検出された遺構については、詳細な時期と性格が明らかでないが、少量ながらも特徴のある縄文時代と弥生時代の遺物が得られたことにより、当該地域の歴史を構築するための重要な手がかりを得ることができた。また、その他の時代の遺構・遺物については確認できなかったことから、近現代に住宅地・畑地として造成されるまで、それらの時代以降については人間の生活の営みが希薄であった場所と考えられる。

以下、立野遺跡における縄文時代と弥生時代の様相について概観する。

1　縄文時代

遺物の出土量は多いとは言えないが、旧地形上では尾根の先端部に位置するとみられる調査区西部において、早期の土器やチャート、黒曜石の剥片が集中的に出土した。このことから、調査区の南側へ縄文時代の遺跡が広がる可能性が推定できる。

早期土器は、その多くが中葉の平栫式に属するものである。文様の面で上半部に沈線文・列点文、下半部に単節縄文を施す点や、器面の色調の面で、ほとんどが橙色あるいはにぶい黄色を呈する点は、一般的な平栫式の特徴と一致する。小さな破片が多いため情報は断片化しており、存続時期や集団の全容は知ることができないが、さほど多くの個体があったとは考えられず、比較的規模の小さな行動の痕跡と推定されよう。同様の内容を示す遺跡として、本遺跡の東方約３km 付近に位置する観請原遺跡が挙げられる（文献５）。

一方、Ⅲ層からは後期後葉、晩期に属する土器片が出土しているが、これらもまとまった状態の出土ではない。19 は既に述べた通り、未確定ながら曽畑式に属する可能性がある。そうした場合、鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積層であるⅢ層は、最終的には縄文時代晩期に形成されたとしても、長い期間の遺物を包含しながら堆積した層であることになろう。22 は一見、無刻目突帯文の祖形となる口縁部肥厚帯に見えるが、口唇部にみられる凹部や波状をなす点など、相違点もある。23 は類例の少ないものである。残存している頸部より下位の状況は判然としないが、わずかに肩部らしき屈曲がうかがえるため晩期の土器であることが推定できる。突帯をめぐらせる部位は、いわゆる刻目突帯文土器のそれとは異なる。外反する器形の特徴は無刻目突帯文土器に近く、鹿児島県上加世田遺跡の晩期「竪穴住居」出土資料に類似のものがある（文献８）。ただし、それには突帯に付された短沈線状の刻みはない。現段階ではその出自について特定することができないが、沈線文と突帯の結合、すなわち刻目突帯文土器の成立に係る資料との位置付けが可能となるかも知れない。

縄文時代の石鏃・石匙は、Ⅵ層出土のものが早期に属することがほぼ確実であるが、Ⅲ層出土のものは上述の理由から時期の特定が難しい。石器の在り方に関しては、出土点数は少ないものの、製品に加えて石核や剥片も出土していることから、小規模ながら調査区内において石器製作がなされた可能性がある。また円礫はみられたものの、明確な磨石や石皿は出土していない。ただし、調査面積が限られることから、このことをもって本遺跡の性格や生業形態を推定することは避けるべきであろう。

２　弥生時代

少量ではあったが、Ⅲ層より中期に属すると考えられる土器片が出土している。口縁部や脚台の付く甕の底部の特徴は、大きくは肥後地方～薩摩半島北部の黒髪式の特徴に近いものであり、逆「Ｌ」字状をなす甕や、鋤先状となる壷の口縁部の特徴から、黒髪Ⅱ式にあたり中期中頃に相当するものと考えられる（文献９）。従来、当地域においては中期に属する土器の様相が明確でなく、中溝式を主体とする宮崎平野とは様相が異なることが推定される程度であった。そのような中、基準となりうる資料として、えびの市の本地原遺跡より出土した土器群は重要である（文献７）。ＳＡ１（花弁状竪穴建物）では黒髪式系の甕と磨製石鏃、及びその未製品が、包含層中から瀬戸内系の凹線文を施す甕や山間部特有の玉縁状口縁部と厚い器壁を有する甕が出土しており、霧島山系北麓にあたる当地域に、各地域の特徴を有する土器が混在していた状況を知ることができる。本遺跡の資料はそれらよりわずかに古く位置付けられるものであろう。

３　結語

以上のように、本調査は狭い範囲を対象とするものであり、集落における居住を示す竪穴建物は検出できなかったが、土坑３基や掘り込み１基など、一定期間・密度の生活・行動の痕跡が確認された。また、縄文時代早期の撚糸文土器・平栫式土器、弥生時代中期の肥後系の土器、長崎県針尾産の黒曜石製の石鏃、佐賀県多久産のサヌカイト製の石匙など、この地域における当該期の生活の営みや地域間交流の様相を考える上で、良好な資料が得られた。さらに縄文時代晩期土器は、突帯を巡らせる土器の系譜を知る上で重要な個体と位置づけられる。今後の周辺域でのさらなる出土資料の積み重ねが望まれる。

【引用・参考文献】

１）宮崎県教育委員会　1973 『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告書（１）』
２）宮崎県埋蔵文化財センター 1999 『内屋敷遺跡』（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告 書第 14 集）
３）宮崎県埋蔵文化財センター 2000 『山中前遺跡』（宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告 書第 26 集）
４）小林市教育委員会　1993 『小林市遺跡詳細分布調査報告書』（小林市埋蔵文化財調査報告書第７集）
５）小林市教育委員会　2004 『観請原遺跡』（小林市文化財調査報告書第 19 集）
６）小林市教育委員会　2004 『永野遺跡』（小林市文化財調査報告書第 17 集）
７）宮崎県教育委員会　1994 『本地原遺跡』
８）河口貞徳　1972 『上加世田遺跡発掘調査概要－第５次－』 加世田市教育委員会
９）中園 聡　2004 「第４章 土器の分類・編年と様式の動態」『九州弥生文化の特質』九州大学出版会

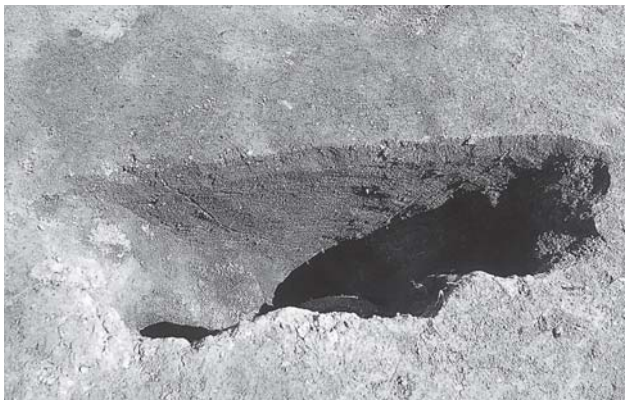
写　真　図　版

調査区西側　Ⅱ層上面（東から）

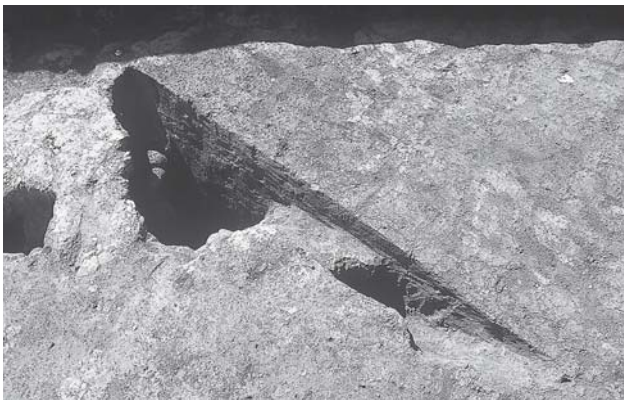
調査区東側　Ⅱ層遺物出土状況（西から）

SC１　検出状況（東から）

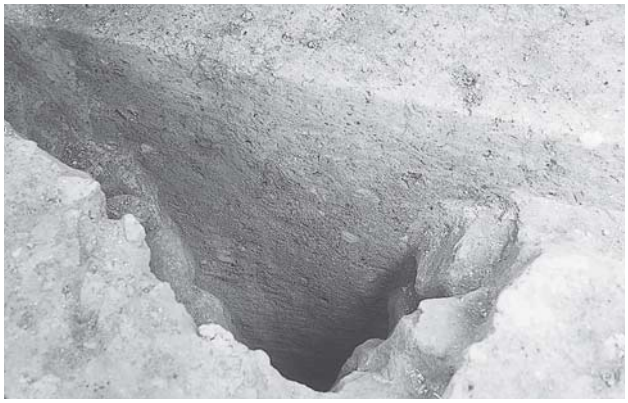
SK１　検出状況（南から）



SC１　半裁状況（東から）



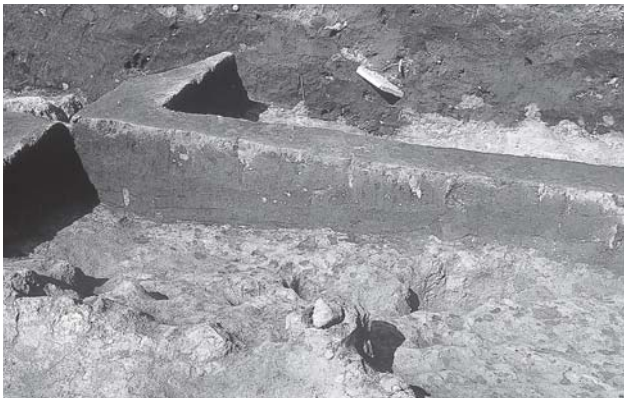
SC２・３　半裁状況（北西から）



SC３　半裁状況（北西から）

SK１　掘り下げ状況

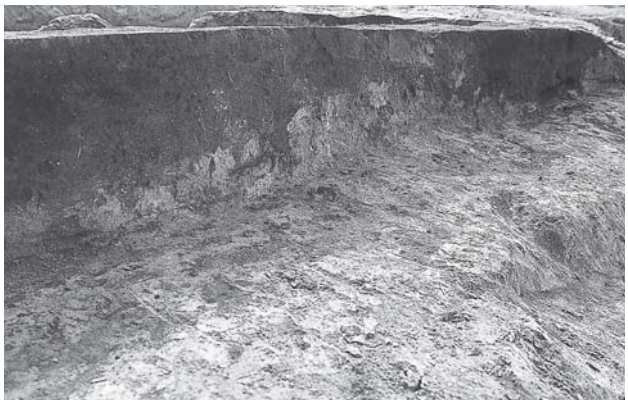
SC１　完掘状況（南から）



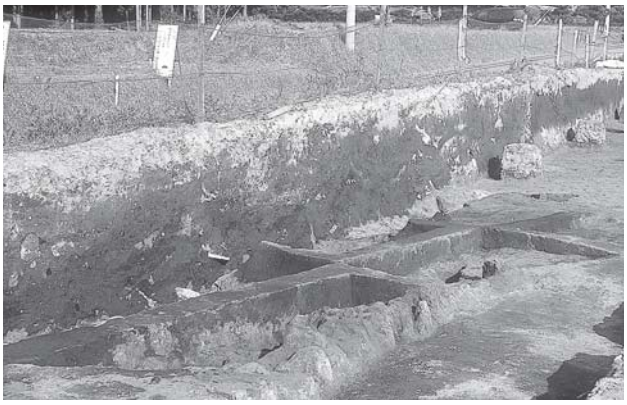
SK１　土層観察ベルト（南から）

SK１　土層観察ベルト（西から）

SK１　土層観察ベルト（北西から）



SK１　土層観察ベルト（北東から）

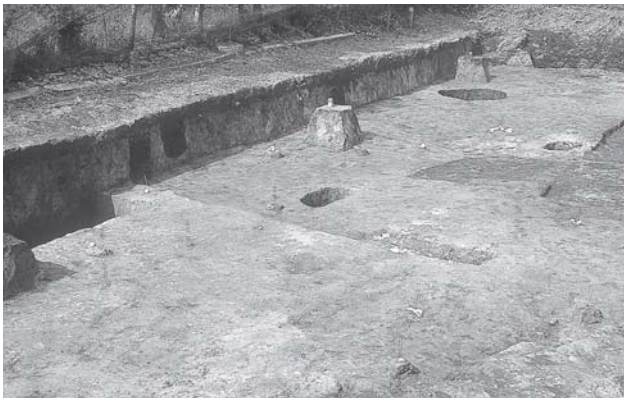


SK１　土層観察ベルト（西から）

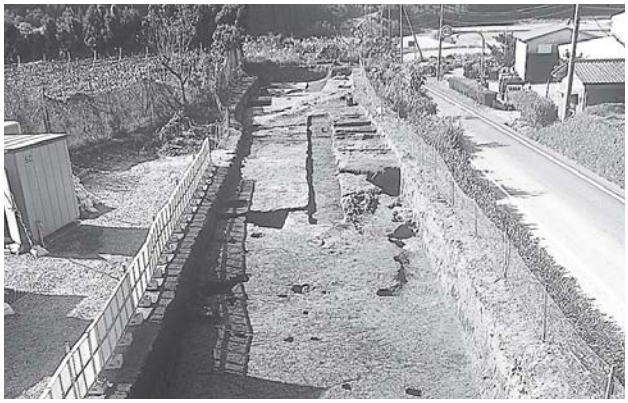
SC２・３　完掘状況（北西から）

SC２・３　完掘状況（北西から）

調査区西側　Ⅴ層上面(西から)



調査区西側　Ⅴ層上面(北西から)



調査区全景　Ⅴ層上面(西から)

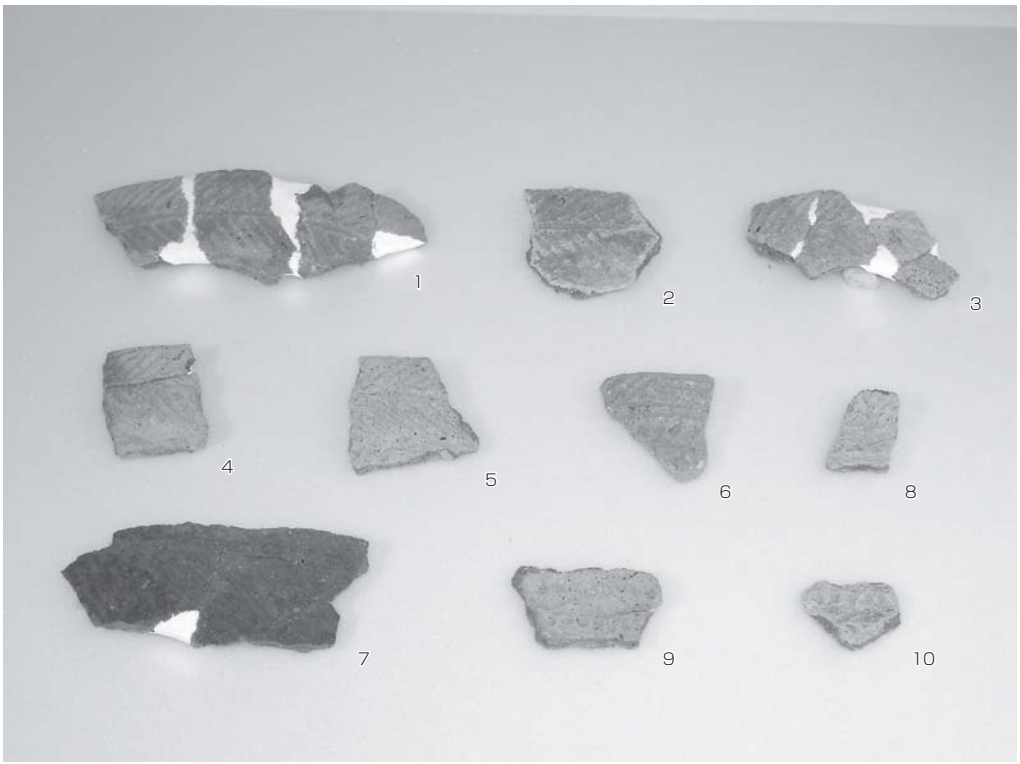
調査区中央部　Ⅴ層上面(南西から)

調査区東側　Ⅴ層上面(東から)

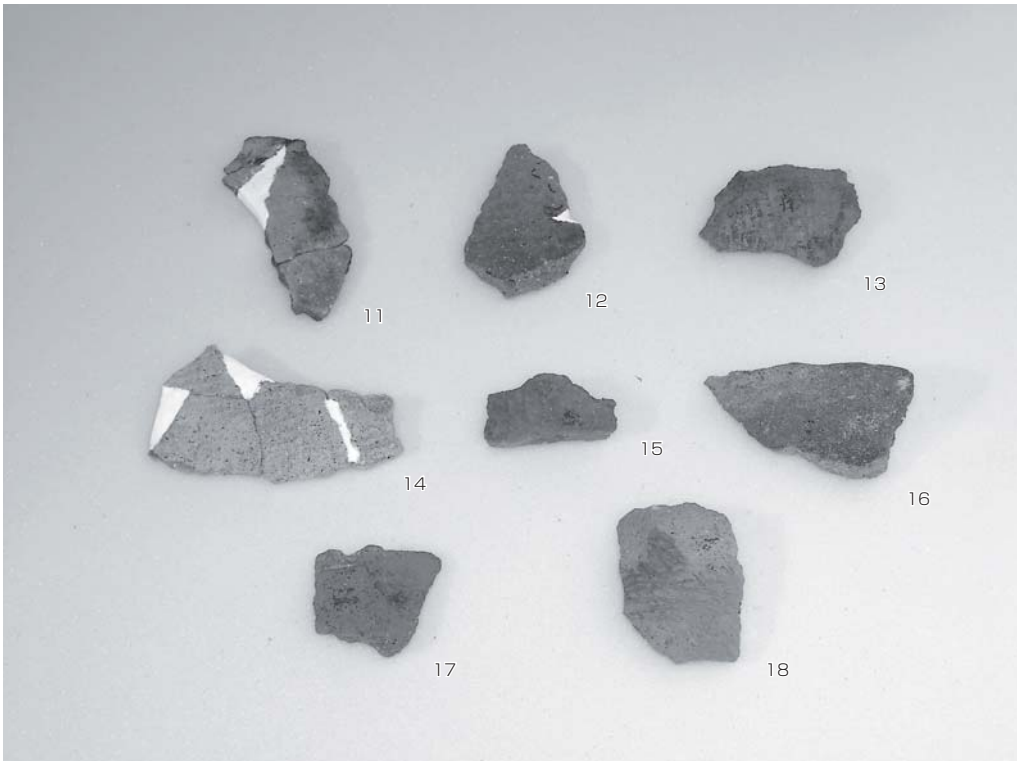
調査区西側　Ⅵ層上面(西から)

調査区西側　Ⅵ層上面(北から)

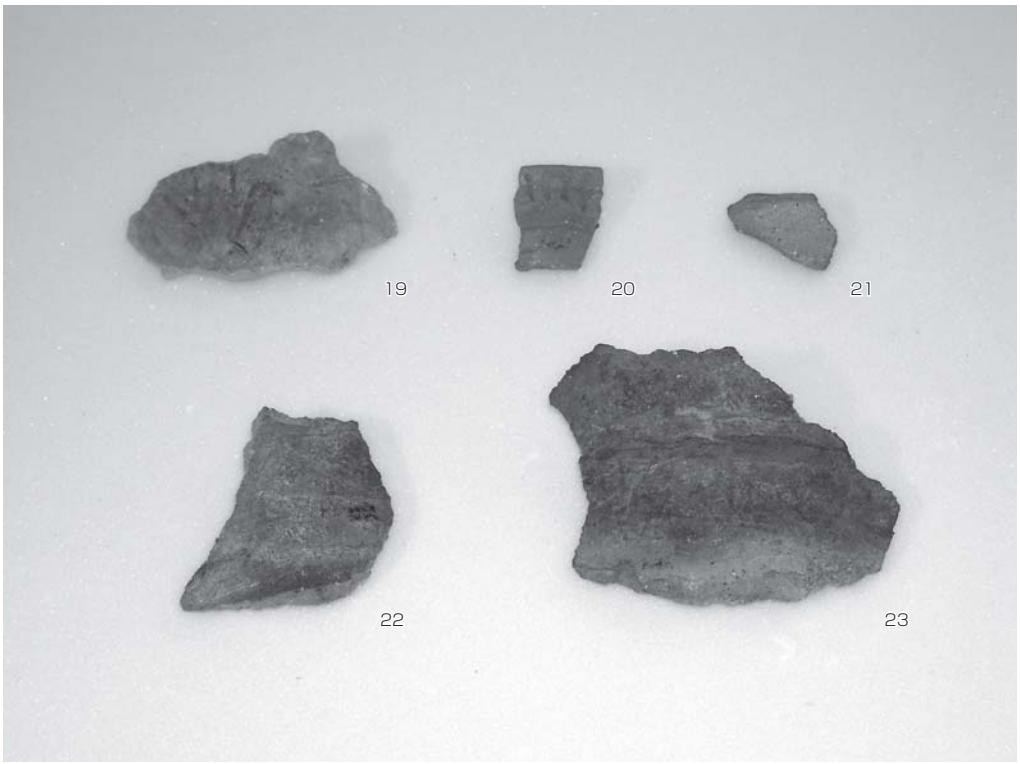
調査区西側　Ⅵ層上面(北から)



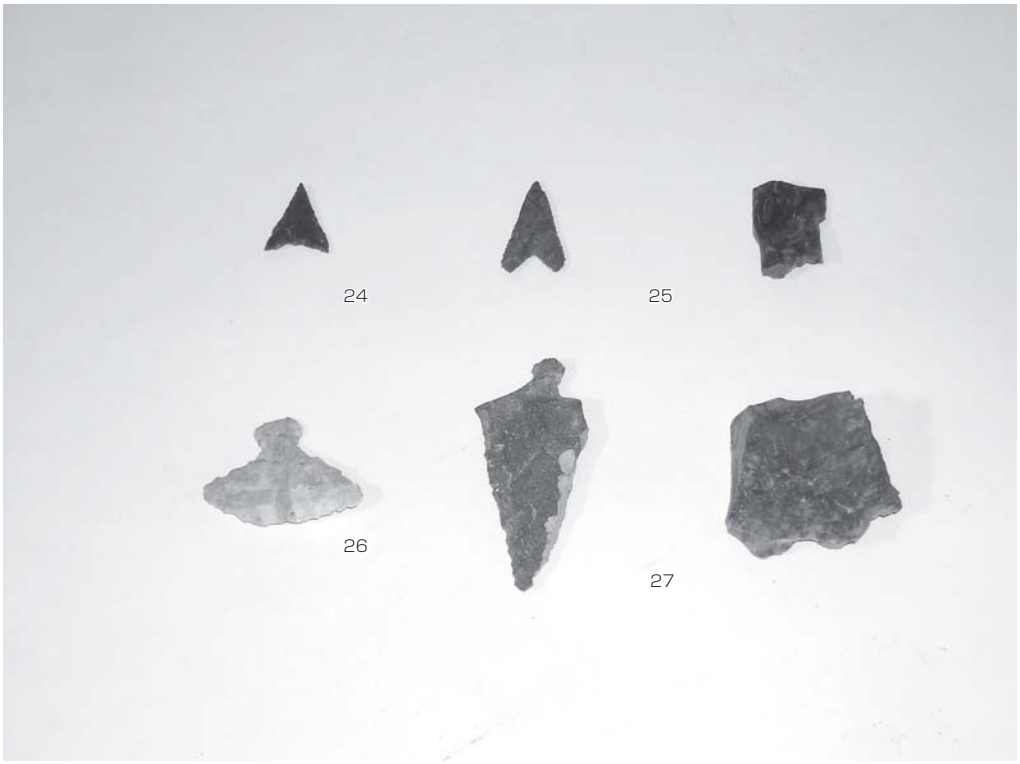
縄文時代早期の土器①



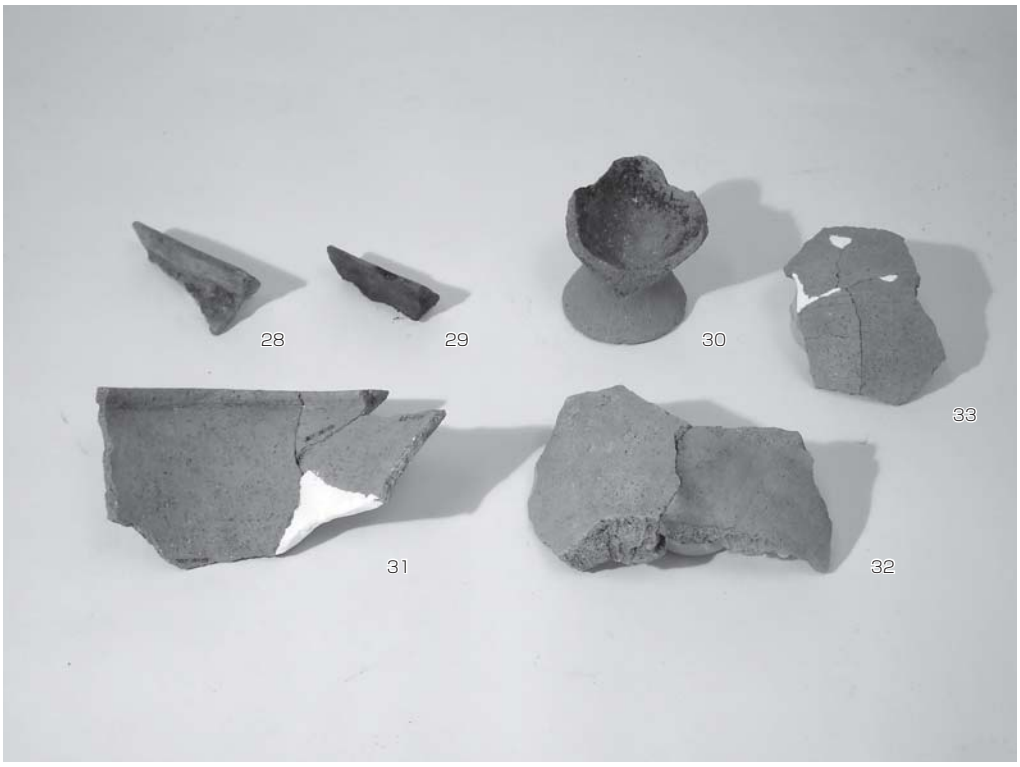
縄文時代早期の土器②



縄文時代後期・晩期の土器



縄文時代の石器



弥生土器

Ⅲ層出土礫・軽石

報告書抄録

ふりがな	たてのいせき
書名	立野遺跡
副書名	地方道路交付金事業南西方工区道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	―
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第２０８集
編著者名	丹　俊詞　　谷口　千尋　　吉本　正典
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212　宮崎市佐土原町下那珂4019番地　TEL 0985-36-1171
発行年月日	2011年11月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
立野遺跡（たてのいせき）	宮崎県小林市（みやざきけんこばやしし） 大字南西方（おおあざみなみにしかた） 字立野（あざたての）	45205	2002	３２度 ０１分 １０秒	１３０度 ５３分 ２２秒	20060821 ～ 20061031	570㎡	平成18年度地方道路交付金事業南西方工区道路改良工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
立野遺跡	集落 散布地	縄文時代 弥生時代	土坑　３基 不明落ち込み　１基	縄文土器、弥生土器 石鏃、石匙	

要約	縄文時代・弥生時代の遺物（土器・石器）が出土。土坑３基、不明落ち込みが１基検出された。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第２０８集

立野遺跡

地方道路交付金事業南西方工区道路改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１１年１１月３０日

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター
〒 880-0212
宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地
電　話　0985(36)1171

印　刷　有限会社 宮崎新生社印刷
〒880-0124
宮崎市新名爪中牟田766番地
TEL 0985(39)6148　FAX 0985(39)4240